

バリ島一周自転車の旅

酪農家 吉川友二

バリ島

バリ島の記憶。『兼高かおる世界の旅』（一九五九年から一九九〇年までテレビ放送をされた世界の各地を旅する番組）で見たのだろうか？この番組は小学生の時の日曜日の昼間、目を丸くして見ていた。かがり火に照らされている上半身裸の男たち。何か神聖な行事をしているようである。その映像の記憶。

そして、大学生の時に出会った本。『魔女ランダ考 演劇的知とはなにか』中村雄二郎著（岩波書店）。今、手元にあるこの本の裏表紙には「'90.11.15.東北水研のわかたか丸（水産学部）の時にバイトで乗った、水産試

験場の調査船の名前) が塩釜に入港した折に買い求める」と書かれている。魔女ランダ (Rangda) とは、バリ島の悪霊の親玉みたいなもの。

最後に、コロナ禍前のこと。東京のコーヒーショップの社長が「ありがとう牧場」に來られた。コーヒーが好きすぎて、大学生の時にコーヒーショップを始めてしまったそうだ。まだ若いのに今は二店舗のコーヒーショップを経営しているとのこと。彼がバリ島にコーヒー農園を所有していると聞いて、テールを囲んでいたみんながバリ島へ行こうと盛り上がった。彼の焙煎したコーヒー豆は見てすぐわかるほどの浅煎りで、浅煎り豆のコーヒーがこんなにも美味しいとは知らなかった。美味しいコーヒーを追求したらこの浅煎りにたどり着いたそうだ。

がん

十月二十三日、胃の膨満感が一週間近く続くので、足の国保病院へ行く。「胆管 (肝臓が作っている胆汁を十二指腸へ送り出す管) がつまっている。帯広の総合病院へ入院の準備をしてすぐに行くように。一週間もほっといたら死ぬよ。」と言われる。

翌日、帯広厚生病院へ行くと、その日の内に、内視鏡を使って塞がっている胆管にステント (管) を入れて胆管を広げる手術をする。その時にすい臓がんが発見される。そのまま一週間の絶食と、様々な検査をするために

十日間入院をする。

がんと言われて、いろいろな思いが浮かんでは消え、浮かんでは消える。父と同じ年齢までは生きられるものだと勝手に思い込んでいた。

一週間の絶食の後に出てきた食事を食べる時には、食べ物育ててくれた農家の人たち、漁師さん、食事を作ってくれた人、病院まで食事を運んできてくれた人たち、すべての人たちに感謝の気持ち湧いてくる。お箸で一口、口に入れては箸を置いて味わって食べる。入院中、顎が筋肉痛になった。

久しぶりに浴びるシャワー。シャワーの水滴の粒が肌にぶつかる感覚が新鮮である。家にいた時には音楽を聴きながらシャワーを浴びていた。音楽を聴きながらシャワーを浴びるなんて、なんてもったいないことをしていたのだろうか。

十一月十一日、北見の野村商会 (自転車屋さん) へ修理に出していた自転車を取に行く。患者の気持ちとしては、がんと分かったのだから、すぐにも抗がん剤の治療をしてほしいのであるが、病院の都合でそういうわけにもいかないらしい。抗がん剤の治療が始まる前に旅行でもできないかと、野村商会の近くのイオンのJTBでバリ島へのツアー旅行のパンフレットをもらう。パンフレットを見ると、ツアーの申し込みまでに時間がかかり、抗がん剤の治療が始まる前までに、バリ島へ行くのは無

理のようである。帰り道、今まで何回も通った自転車屋さんからの風景が輝いて見える。バリ島のパンフレットは家の壁に張って眺める。

十一月二十一日、退院のあと何回か通院をして検査をしたが、その検査も一通り終わり、今日から内科から外科の診療に変わる。化学療法室のベッドの予約の空きがなくて、十二月十二日から抗がん剤の治療を始めることになる。

抗がん剤の血管注射をしやすくするために、鎖骨の下にC Vポートと言われる管を入れる必要がある。抗がん剤を始めるまでになにかできたらと、抗がん剤を始める前日の十一日にC Vポートを入れてもらうことにする。

十一月三十日夜、たまたまグーグルマップでバリ島を検索してみると、明日出発のチケットの料金が出てくる。ツアー旅行しか頭になかったが、自分でチケットを買ってバリ島へいけばいいことに気が付く。

まずは帯広ー羽田の飛行機の空席をエアードゥーで調べる。その時間に合わせてバリ島までの飛行機のチケットが一番安かったTrip.comという予約サイトでバリ島往復のチケットとバリ島での初日と最終日のホテルの予約を取る。上田の実家の兄にも顔を出そうと、モバイルスイカを作り、新幹線の予約を取りと、予約を取り終えると深夜過ぎになっていた。かなり手間取りながらも無事に予約を取り終えることができた。

バリ島自転車旅行

十二月三日（日曜日）帯広空港から長野県上田市

今回の旅は、いつもの自転車旅の相棒の鉄製の自転車ではなく、ロードバイクと呼ばれるカーボン製の自転車にする。鉄製の自転車の重さは二十キロくらいあるが、カーボン製の自転車は八キロくらいである。キャンプ道具は持たないで、荷物は最小限にして、夜は宿泊施設を探して泊まるという大名旅行の予定である。自転車を含めて今回は荷物が軽いので、旅の移動が本当に楽であった。いつもは必要になる飛行機への手荷物預けの追加料金も払うことなく預けることができた。

まずは兄に会いに実家の長野県の上田へ行く。兄が駅に車で迎えに来てくれている。宮崎駿監督の映画『千と千尋の神隠し』のモデルになったと言われる温泉へ行ってみようということになる。田沢温泉である。

ドラッグストアやスーパーマーケット、チェーン店のレストランなどができていて上田の郊外もかなり、にぎやかに変わっている。川に沿ってできた狭い平地の道を上っていく。道の上りの傾斜がきつくなってくると、昔ながらの田舎の風景につつまれる。小さな沢の上に沿ってある道が、車一台がやっと通れる広さになると、右手に古びているけれども四階建てくらいの立派な木造の宿がある。建物の二階あたりに、『千と千尋の神隠し』の温泉宿の女中部屋の周りがある廊下と同じように、建物

の壁から廊下が張り出している。

白人の若い男女が車を狭い駐車場に停めて、初冬の夕暮れ間近の道を宿に向かって歩いていく。

十二月四日（月曜日）上田からバリ島・デンパサール

朝始発の新幹線に乗る。私は寒くて、ズボン下をはいてかなり着込んでいるのに、周りに座っているサラリーマンたちはワイシャツに背広である。長野のサラリーマン、寒さに強すぎだろう。

本を読まないで、車窓からの眺めを懐かしんでいたら、いつの間にかうつらうつらとしてしまう。五年振りの海外だろうか？「しあわせチーズ工房」の本間君とフランス、スイスのチーズ工房を巡る旅をして以来である。

上野駅で下車をして、案内板を頼りに、なんとか京成駅にたどり着く。京急スカイライナーの切符の自動販売機では大きな荷物を抱えて切符を買うのに手間取ってしまう。成田空港に着いてからも出発ロビーでないところに行ってしまう。なんとか九時にガルーダインドネシア航空のカウンターにたどり着き、自転車などの機内預かりの荷物を預けることができはつとずる。

インドネシア・ルピアに両替をしてから空港内の売店を見て回る。羽田空港に比べるとかなりスケールが小さい。セブンイレブンで飲み物を買うことにする。両脇に棚があつてウナギの寝床のような細長いお店である。こ

のセブンイレブンはお買い物をしてからレジに並ぶのではなく、先ずは列に並んで列が進むにつれて両脇にある棚から商品をかごに入れていって最後にレジでお金を支払う。自分の国へ帰るお客さんが、小銭を使い切るためだろうか、二十人くらいの人が列に並んで繁盛している。私も並んで飲み物を買って、搭乗口に行くと、十時半の搭乗時間に遅れてしまう。

南国に行くというのに、ズボン下を履いてダウンジャケットを着たまま機内に乗り込む。こんなに厚着をしているにもかかわらず、機内は冷房が効いていて寒い。毛布を一枚余計に頼んで、毛布を二枚被る。南の島に旅行をするときには薄いダウンジャケットが必需品である。これだけ寒いのに乗客の中にはタンクトップでお腹を出している若い白人の女性がいる。

ネルソン・マンデラを主人公にした「インビクタス」という映画を映画リストの中に見つける。私は一九九四年から、九七年までニュージージーランドの酪農場で働いていた。その時にニュージージーランドのテレビでマンデラ氏を見た。マンデラ氏は「ニュージージーランドへと向かう飛行機の中で、「どこのおじいちゃん？」と小さな女の子に話しかけられた」とニコニコしながらお話を始められた。マンデラ氏は人種差別政策（アパルトヘイト）を打倒した戦士という勝手なイメージを持っていたので、マンデラ氏のユーモアと笑顔が強く印象に残った。ニュー

ジーランドに初めて来た日からお世話になっていたポーソンさんは南アフリカのご出身で、人種差別が嫌でニュージーランドへ移民をしたのだとおっしゃっていた。

テレビでマンデラ氏を見た後マンデラ氏の自伝『Long Walk to Freedom(自由への長い旅)』を買った。そして日本に帰ったあとも同じ本の朗読本を買った。マンデラ氏は一九六四年(私の生まれた年)から、一九九〇年までの二十七年間を獄中で過ごした。そして一九九四年、南アフリカで初の全人種が参加した普通選挙によって大統領に就任している。この自伝を読んでまず思うのは、マンデラ氏の詳細にわたる記憶である。記録を書き残さなければならぬという思いが最初からあったのだろう。そして、信念に基づいて行動して、貫き通す強さ。また監獄の看守にも示す、すべての人間への愛である。マンデラ氏の人格がなかったら、白人たちも黒人の仕返しが怖くてアパルトヘイトをやめることはなかったであろう。

『自由への長い旅』ではマンデラ氏が大統領になるまでが書かれている。そしてこの『インビクタス』という映画ではマンデラ氏が大統領に就任してから、一九九五年に南アフリカで開催されたラグビー・ワールドカップで南アフリカを優勝に導くまでのお話を映画化している。南アフリカでのワールドカップが開催された年、私はニュージーランドにいた。ニュージーランドのオールブ

ラックスと南アフリカの決勝戦を親方のアラン青年と、わざわざ一時間以上もかけてラグランという港町のパブまで行って、パブリックビューイングで応援をした。誰もが負けるはずがないと思っていたオールブラックスが破れて南アフリカが優勝した。

この『インビクタス』を見ていて、ニュージーランドのテレビで見たマンデラ氏と、パブリックビューイングで見たラグビー・ワールドカップが繋がった。

余談になるが、長崎のサッカーチームのVファアレンをジャパネットたかたの創業者が買い取った二〇一七年にVファアレンはJ2からJ1に昇格している。

午後六時にバリ島の州都のデンパサールの空港に到着する。スマホを使った入国審査に手間取って、税関を出ると八時になっている。スマホの電池が空になるのではと不安になった。スマホの入国審査だけはやめて欲しい。

ホテルまでタクシーを使うことにする。運転手の名前はオスカルというおじさん。「ジャワ島の火山のブルーファイアーと一緒に見に行こう」、「豚肉料理のおいしいお店があるから一緒に行こう」などなど、人懐こいのか、営業熱心なのか?何かあったら連絡をくれと電話番号を渡してくれる。

『地球の歩き方 バリ島』に蚊が媒介をする病気について書かれていた。これから抗がん剤の治療も始まるし、

気にかかっていたので、オスカルにそのことについて聞いてみる。「蚊にも少くしだけ分け前を与えてあげたらいいんだ。蚊なんて気にすることない」と返事がかえってくる。

デンパサールの夜、狭い道に車とバイクが行き交い、道の両側に人があふれている。オスカルに降ろしてもらったホテルは目的のホテルとは名前がちよつと違って、そこから少し歩いてようやくホテルに落ち着くことができた。

十二月五日（火曜日）デンパサルからウブド（Ubud）

きのうの早朝に上田から始まった旅と、昨夜の南国との未知との遭遇のインパクトが大きかったせい、ホテルのベッドで目覚めると、もう旅に出て何日もたったような気がする。

生まれて初めての熱帯である。バリ島は南緯八度に位置している。インドネシア共和国の島の一つで、面積は北海道の六・八%の広さ（沖縄本島の四・七倍の大きさ）である。人口は四百三十一万人。人口密度は七六〇人／㎢で北海道の十二倍の人口密度（沖縄本島の人口密度は九五二人／㎢）。州都はデンパサル。人口の九〇%がバリ人であり、人口の九〇%がヒンドゥー教徒である。

バリ島の地形図を見ると、この小さな島に三〇〇〇メー

トルを超える山があるのが驚きである。アグン山三一四二mである。富士山のような形をした独立火山峰である。島の中央には東西に火山が連なっていて、東西に長い島である。日本と同じく環太平洋火山運動で出来た島である。

ホテルの朝食バイキング

を優雅に食べる。胃の膨満感があり、バリのお料理をあまり食べられないのが残念である。四組のお客さんがいる。西洋人と東南アジア人が半々である。中庭のプールの脇のテントにコックさんがいて、注文をするとオムレツなどを焼いてくれる。水着を着てプールの縁にあるガーデンチェアに寝ている人も数人いる。

自転車でホテルを出発すると、昨夜以上に道にはバイクの喧騒であふれている。バイクの二人乗りは当たり前で子供を抱えた三人乗りも見かける。ヘルメットをしていない人も二割くらいいる。バイクをレンタルしたのだろうか、バイクに乗っている白人も結構いる。交差点には信号がない。右折するバイクは対向車の流れのタイミングを見計らって右折をする（日本と同じく車・バイク



バリ島

は道路の左側通行)。これだけの交通量で信号があったら、大渋滞になってしまうだろう。道は狭く、道の両側にあるお店の駐車場も狭い。駐車場には自動車駐車場から道に出すために道の車を止める人がいる。

このバイクの量の多さに、交差点で右折ができない。グーグルマップを頼りに、狭い路地の市街地を徘徊して、方向感覚も失って、これは前に見た風景だなあと思っていると、また同じ交差点にやってくる。そしてまた右折をしそこなう。いつまでたってもデンパサールの街中から脱出できない。

四回同じ交差点に来ただろうか。今度はバイクの運転手が道を譲ってくれることを信じて、交差点のかなり手前から徐々に道の中央に寄って行って、右折をするバイクの流れに入り込む。いつもの鉄の重たい自転車でもキャンプ道具を詰めたバッグを自転車の両側につけていたら、ここで右折はできないかったかもしれない。自転車で走っている人は誰もいないので自転車で走っていると遠慮してしまう。

今日の目的地は観光地で有名なウブドである。島の南にあるデンパサルから北へと向かって走る。島の中央には山があるので、ウブドまでなだらかな登り坂になる。ウブドまでバイクの流れは途切れることがない。これによく事故が起きないものだとみていて心配になるが、みんなバイクの運転を楽しんでいるようだ。一年中暖かい

バリ島の風を切って走るのは気持ちいいだろう。また狭い道路事情と駐車場事情を考えると、車ではかえって不便であろう。

ウブドの中心街にほど近い所に、アプリで今日の宿を見つけよう。アプリではホームステイと書かれていた。車の入れない狭い路地に入っていくと、両側にテント屋根のお店が並んでいる。日本の参道の商店街のようである。路地は谷の斜面にある。そこを行ったり来たりして予約をした宿の入り口らしき門を見つける。門の前には、道の上に直にお米・お花がお供えしてある。

石の階段を五、六段登った所に、彫刻の施された石づくりの狭い門がある。人がすれ違える程度の広さの門で、荷物を出し入れするときは不便であろう。路地からは家の中は見えないが、狭い門を入ると右手に庇が出ている。広間があり、管理人の若者がいる。広い中庭があって、中庭の左手に四畳くらいの祭壇？がある。中庭の奥の突き当りに二階建ての家があって、一階の二部屋と二階の二部屋を宿に使っているようだ。中庭の右手にはプールもある。こんな傾斜地なのに水が豊かなのだろうか。立派な屋敷であるが、地主がお金持ちの家なのだろうか、それともみんながこんな家に住んでいるのだろうか。

まだ明るかったので、管理人の若者にお勧めの観光地を紹介してもらおう。ライステラス(棚田)と滝があるそうである。ウブドからは上り坂の傾斜が少しきつくなる。

ライステラスの駐車場には、ライステラスの風景写真の看板がある。入り口の小屋にはおじいさんがいて、入場料を取っている。夕方五時を過ぎていたが、子供を連れて家族が入っていく。駐車場からは熱帯雨林に視界を遮られて、ライステラスは見ることができない。これからの旅の間にはライステラスもきつと見る機会があるだろうと、駐車場の看板を見て満足して帰る。

八時を過ぎた頃に夕食を食べに出る。宿を出てすぐに路地に面して一メートルほど高くなっているテラスにドイツ人と思われる若いカップルがいる。テーブルの上にはストローをさしたココナツが置かれている。お店にはドアも壁もなく、屋根がかかっているだけである。入口は石の門の片側を取り壊して、広くしてある。

宿に遅くなつて帰ると、この邸宅のご主人であろうか、中庭にお父さん（私より少し若いだろうか）がいる。中庭に沢山並んだご供物を、どれでもいいから持つていけと勧めてくれる。バナナの皮？で包んだ果物をいたたく。ここで少し『魔女ランダ考』からバリ島についての解説をする。魔女ランダとは死と再生を司る女神ドウルガの化身であり、魔女・悪霊である。バリ島では神々と悪霊との境界が明らかではない。魔女ランダは祭りの時に、劇の中で村人たちをトランス状態（憑依状態）に引き込み、鮮烈に生き返る。

バリの人々の棲む世界は悪霊で充ち充ちている。バリ

の人々は暗がりを怖がる。屋敷は悪霊たちからの避難所としてつくられている。屋敷のまわりにめぐらした土塀、狭い入り口の門、門の内側には魔よけのための彫刻をほどこす。家の前の地面にじかに毎日供え物を置くのも悪霊たちを慰めるためである。悪霊は動物や人間に変身をするだけでなく、自動車やバイクに変身することもある。悪霊の存在の実感が、神々の存在も身近なものにする。

山（北）の神々と海（南）の悪霊たちの棲みかという南北の方向感覚とこの悪霊の存在がバリ島の生活空間に濃密な意味を与えている。住居は人間たちの住居というよりは（カミ）の住居としてつくられている。金持の屋敷も貧乏人の屋敷も敷地の広さが変わらないだけでなく同じ構造あるいは配置を持っている。

十二月六日（水曜日）ウブドからネガラ

朝食は八時からだという。この遅い朝食もバリ流だろうか。今朝もバリ流にのんびりと過ごすことにする。朝起きて中庭へ出ていくと、お腹の大きい恰幅のいいおじいさんがいる。この人がこの屋敷の所有者であろうか？「ありがとう」「こんにちは」など現地の言葉をおじいさんに教わり、ノートに書きつける。

朝食は石の門の北側にある屋根だけがかけてある二階のバルコニーである。そこからは路地と路地を挟んで向かいの家、谷の下に広がる熱帯の森を見降ろすことがで

きる。花を咲かせている木々、鳥のさえずり、一日中このバルコニーで寝ころがっていたい。

これからの旅の予定は、ウブドから海岸線まで下って、それから海岸線を時計回りにバリ島を一周することである。ウブドを出て南西方向に下っていくと、バイクの通りも少なくなつて、田園風景が広がってくる。水田は何期作なのだろうか？刈り取つた後の田んぼがあつたり、穂もまだ付けていない田んぼがあつたり、穂をつけて刈り取り前の田んぼがあつたりする。一年中いつでも田植えができるのだろうか？

水田稲作は連作ができるために、アジアモンスーン地域での高密度の人口を支えている。私は連作ができる水田稲作を「奇跡の農法」と呼んでいる。水田稲作は集落総出での田植え、水田の水の公平な分配などが必要になり、集落、社会の形成や人の精神の形成に、大きくかわっていると思う。水田稲作地帯ということで、日本とバリ島の社会や人の精神は共通点も多いのではないだろうか。

海を見下ろす道を走って、道が海に突き当たつたところにポツンと一軒だけレストランがある。このレストランも壁がなく屋根だけで、海が見えるテーブルに二、三組のお客さんがいる。バイキング方式なのだろうか、いろいろな料理がお寿司屋さんのようなガラスのカウンターの中に並んでいる。やり方がよくわからないが、お店の

人にこれが欲しいあれが欲しいと指をさして、お皿に取ってもらう。ココナツの殻の上を切り取って飲むココナツミルクも初めて飲んでみる。テーブルの上にはストローをさしたココナツ、私の南国のイメージそのままである。お腹いっぱい食べて、ココナツミルクも飲んで、十万里ピアである。日本円にすると約千円である。

少し内陸に入ってネガラという町に着く。狭い道を迷いながら、今日の宿にたどり着く。裏路地を走っているだけで、見るものがすべてが珍しく観光になる。

宿のお母さんが、子供たちが一流の大学へ行って活躍していると自慢してくれる。まだ小学生くらいの男の子も庭でウロチョロしている。宿代は一泊二千元。昨日の宿もそうだが、バリ島はダブルベッドの部屋しかなくて、二人一泊の値段であり、一人だからといって安くはない。この宿のシャワーはお湯が出なかったが、水でもなんとかなる気温なのである。

バリ島のローカル食堂はワルンと呼ばれる。ワルンをグーグルマップで探してせまい裏路地をたどる。ワルンに着くと、広い庭に池があつて、その周りに東屋が五六棟建っている。お客さんはまだ時間が早いのか、誰もいない。入口にある小屋にいたお店の人に聞くと、どの東屋に座ってもいいと言われる。壁のないこの開放感がない。

ラミネートされた、ぼろぼろのメニューを渡される。

ナシゴレン（ナシはお米、ゴレンは焼くでチャーハンのこと。ミーゴレンという焼きそばのこと）百五十円、ドラゴンフルーツジュース百円、チョコレートクリーム入りアボガドジュース百五十円をいただく。メニユーに立派なロブスター二百円があったが、わざわざバリ島で食べなくても思い、頼まなかったが、後で頼んでおけばよかったと後悔する。

帰り道で暗くなりかけた道の脇の十坪ほどの広場に、四畳半くらいの大きさの移動メリーゴーランドが設置されていて、お母さんに連れられた小さな女の子が乗せてもらって、はしゃいでいた。

十二月七日（木曜日）ネガラからロヴィナ

熱中症であろうか？夜、軽い頭痛がする。八時前に寝て朝起きると六時であった。

今日は熱中症にならないように、水分補給に気を付ける。暑いと言っても、半袖半ズボンで走っているときは快適で、信号で止まったとたんに汗が噴き出す、そんな暑さである。今年の夏に高校一年生の息子と夏の北海道を自転車走って、日焼けでやけどをした経験を活かして、日焼け止めクリームだけは毎日念入りに塗っている。

バリ島の西の端に近づくにつれて、幹線道路も車通りが静かになる。道が森の中に入って、道の両側の木々がお日様の光が遮られて、とても快適である。サルたちが

森の中から道の真ん中に出てきている。自転車が通ると、森の中に逃げていく。

道が島の西端で北へと折曲がるT字路（チエキ（Ce k i k）という町）に屋台がある。遅い朝ごはんにする。おやじさんと奥さん、小学低学年くらいの男の子がいる。バナナの皮で包んだ白米があり、香辛料は好きだけかけて食べて良いそうだ。見たことのない果物が置いてあって、それを試しに食べることにする。皮がゴツゴツして硬そうな握りこぶし大の果物である。皮にナイフで切れ目を入れてくれる。知らずにかじったら中に種がある。種まで食べていたら、種は食べないで種の周りを食べるんだと教えてくれる。屋台のオヤジがこの果物を食べるとうなる、自分の股間に肘を当てて、握りこぶしを高くつきあげて見せる。後でこの果物はドリアンであることが判明する。

幹線道路を外れて、西に左折する。少し行くと国立公園のゲートがあつて、小屋の中に三、四人の管理人がいる。一人が出てきて、ここから先は未舗装で、許可のある人しか入れないと言う。彼はまた二十代くらいの若者で、日曜日から日本へ行くとのこと。日本で働くのはどうなのか、と聞かれるが、バリ島が一番だと本心から応えた。バリ島の人には日本びいきの人が多くて、サッカー漫画の『キャプテン翼』、バレーボールの西田選手のファンがいた。

別れる時に彼はLovina（彼の発音ではロフィナ）へ行ってみなと勧めてくれる。

島の南側へと回り込むと、右手は崖になつている。バリ島の山々は中央よりも南側にあり、島の南側は平野が狭い。坂道を上つていると、ビンディングペダル（スキーの板に靴を固定するビンディングと同じように、自転車のペダルに靴を固定するビンディングが付いている）の靴がぐらぐらする。自転車を停めて靴をみてみると、靴にビンディングを固定するボルトが一つ取れて無くなっている。この小さなボルトが見つかったら奇跡だよなと思いつつも、万が一つてこともあるかと路肩を行ったり来たりして探す。するとバイクに乗ったおじさんが振り返りながら通り過ぎて行つて、また引き返してきてどうしたと声をかけてくれる。私と同じくらいの年齢だろうか？ 痩せて日に焼けて、農家か漁師らしい風貌である。大丈夫だと応えると、これから坂がきつくなるから頑張れと、言い残して去っていく。見つかるはずがないだろうと探していたボルトもなぜか見つからなってしまう。

道路沿いには果物を売っている人があちこちにいる。路肩に軽トラックを停めて売っている人、道端にテント屋根を立てて売っている人、常設の屋根をかけた小屋を建てて売っている人、お店で売っている人などがある。ここはブドウの産地なのだろうか、道端でブドウを売っているテントが並んでいる。道路沿いにはブドウ畑があ

る。テントでブドウを売っているお母さんと、小学生の娘さんと、四歳くらいの男の子がいる。ブドウを買って食べる。お母さんがバイクでどこかへ出かけていってしまう。ブドウを食べながら子供たちとお店の留守番をする。

前方に稲光が見える。バイクで走っていた人たちがバイクを停めて、シートを持ち上げて雨具を取り出して始める。また走り出す人、雨宿りをする人たちがいる。私も合羽を出して着る。今は雨季なのでしょうがない。南国の雨を楽しもうと雨の中を走る。

ロヴィナが近くなった道でスマホを出して宿を探していると、バイクに乗ったおやじが止つて、俺について来いという。シーブリーズホテル（海のそよ風ホテル）という宿まで連れて来てくれて、明日の朝のイルカツアーに参加しないかと営業を始める。七千五百円だそうだ。おやじを信じて前払いをする。

シーブリーズホテルの隣のバーでは夜中に屋外でライ



トラックで果物を売っているお母さん。手に持っているのが大きい（品種の？）ドラゴンフルーツ。荷台に載っているのがマンゴー、ドラゴンフルーツ。左下が私の愛車

ブが始まる。生演奏の音の振動がベッドから伝わってくる。夜の一時まで演奏が続いた。シーブリーズを心地よく楽しむ予定だったのだが。

十二月八日（金曜日）

ロヴィナからキンタマーニ（Kintamani）

イルカ観光船は朝の六時集合予定。本当に船は来るのだろうか、昨日のおやじを少し疑いながら、ホテルの前で待っていると、青年が迎えに来てくれる。砂浜の浅い海の上にアメンボのような細長い船が浮いている。両脇にアームが出ていてひっくり返らないようになっていいる。船には白人の若いカップルの二人が乗っている。自己紹介をして二人の名前を聞くと、ロシアのシベリアから来た、アントン（チエーホフと同じ名前なので忘れなかった）とニコラである。二十歳を過ぎたばかりだろうか。昨日、ビーチで時間を聞いてきた男の二人組（三代前半に見えた）もロシア人であった。ロシアに帰ったら徴兵でウクライナに送られるのだろうか？バカンスを楽しんでいいるのだから、アントンにはウクライナの話は聞かなかった。

イルカが毎朝集まるスポットがあるのだろうか？陸から五百メートルくらい沖に二十艘くらいのアメンボ船がもう集まっている。イルカが海面に現れると二十艘の船がイルカを追いかけて走り出す。これは動物虐待ではな

いのか？船の脇にぶら下がっているブランコのようになっている棒につかまってシュノーケリングをしながら、海中のイルカを見て楽しんでいる人もいる。

少し寒いので海に入るのをためらって、イルカよりも人を見たほうが楽しいと、他の船に乗っている世界各国から来ている観光客を眺める。みんな濡れてもいいラフな格好をしているのだが、韓国人のお嬢さんたちだけがおしゃれをしている。背中の大きく開いた白いワンピースを着て長い黒髪を海風になびかせているお嬢さんがひととき美しい。

ロヴィナに来る途中に美容室があつて、韓国の女性の歌声が流れていた。バリ島で韓国の歌を突然きいて脳みそがねじれるような感じがした。バリと韓国のイメージがどうしても結び付かない。バリ島でも韓国の音楽、ドラマは人気があるのだろうか。それにしても韓国の女性の歌声はどうしてこうもはかなく聞こえるのだろうか？

アントンはもう長いこと海に浸かっている、少し寒そうに見えるが、海の中のイルカを見つけると青年船長に海の中から手だけを出して指図をしている。私も意を決して海に入る。海に潜ると、イルカのなき交わしている甲高い声が聞こえる。海の奥底の暗闇の中にイルカたちが吸い込まれるように潜っていく。海の上で見ていたイルカと海の中のイルカは全く違う。イルカたちも舟遊びは飽きたのか、現れなくなつて、アメンボ船もバラバラ

と引き上げていく。

イルカ観光を終えて、シーブリーズホテルのビーチに面したデッキで朝ごはんのミアゴレンを食べていると、昨日のバイクのおじさんがやってくる。「義兄弟がバトゥール山の朝日を拝むトレッキングのガイドをやっているんだ。朝三時に出発だ。やってみないか。イルカツアーの船長は俺の甥なんだ」と話しかけてくる。

海で泳いで体が冷えたせいか、出発が遅かったせいか、走り始めると今までにない暑さを感じる。途中の屋台でお母さんにマンガスチン（これが一番私の好みの味だった。ライチ（生では見たことないけど）のような肉質と味である）、ドラゴンフルーツとマンゴーも切ってもらって食べる。切っている途中で、少し悪くなっているのか、ポイと投げ捨てていいのを渡してくれる。ありがたいけれども、捨てたヤツも食べたい。

街の中に入ると、学校の門から高校生の集団がわらわらとバイクで出てくる。お昼は家に帰って食べるのだろうか、それとも今日は半日の授業なのだろうか？バイクの二人乗りをしている子が多い。

今日の目的地であるバトゥール山への上りが始まる。道の幅も車がようやくすれ違えるくらいになる。バイクに乗った高校生が後ろから時々追い越していく。グーグルマップが教えてくれる道を行くが、もっと坂のきつくない道はないのだろうか？立ち漕ぎで何とか登れるギリ

ギリの傾斜の坂道が何度か行く手に立ちふさがる。こんな細い坂道でも、民家があり、お店もあり、ミネラルウォーターが買える。日本でいう農村の過疎、荒廃などはないのだろうか？

車が通るのも大変そうな細い道に木々が覆いかぶさっていて、道にマンゴーが落ちている。熟しすぎて一部悪くなっているが、拾ってただで食べるマンゴーに気分が盛り上がる。

あちこちからサイレンの音が聞こえてくる。サル脅しだろうか？バリ島では犬がどこでも放し飼いにされているのもサル除けだろうか？都会のデンパサルから田舎までバリ島では、放し飼いにされた犬たちがどこにもいる。それとも単に犬好きなのだろうか？この旅で猫は二三匹しか見かけなかった。

T字路で広くなった道に突き当たったところにあるお店で、見たことのない大きい果物から、食べられる部分を取り出しているお婆さんがいる。お金を払って味見をさせてもらう。もともともつと食べると何度も果物を渡してくれるが、お腹が一杯なのでお断りする。後で調べると、これは世界で一番大きい果物らしい。少し行った大きなお店は見たこともないような大きなバナナがある。合羽を着たバイクの人とすれ違ったと思ったら、雨が降ってくる。

道の上から棚畑が上から下へと広がっているのが見え

るところに出る。少し行くと両側が切り立った尾根になる。尾根の上の道路の両脇にお店が現れてきて、にぎやかな街が現れる。

目指していた宿は、この通りにある。人通り、車通りがあまりにも激しい。昨夜うるさくて眠れなかつたので、もつと静かなところにある宿を探すことにする。

街路の喧騒から急な斜面を下って少し行ったところに静かな宿を見つける。

今晩は外に出ずにホテルで夕食も取ることにする。私の部屋の配管が漏れていて、さつきまで配管を直すのに悪戦苦闘をしていた若者が、レストランに行くと今度はコックまでしている。ホテルのレストランのお客さんは私だけだ。さすがにここは標高が高くて寒いのか、しっかりとレストランは壁のある室内にある。ホテルの料理なんてこの男の子が作る程度でいいんだ。バリ島のホテルの肩の力の抜け具合に学ぶ。バトゥール湖の魚の唐揚げを注文する。かなり辛い味付けである。

十二月九日（土曜日）キンタマーニからデンパサール

六時に起きると、バトゥール山は雲に隠れていて、朝日は見えない。ストレッツチ、筋トレ、瞑想をして七時ごろに急坂を歩いて登り、繁華街にお散歩に行く。今この紀行を書いていて、『地球の歩き方』を調べてみると、このにぎやかな街は、キンタマーニと呼ばれる町である。

切り立った尾根と想っていたのは、カルデラの外輪山である。もともとはバトゥール湖（カルデラ湖）のほとりにあつた村を、一九二六年のバトゥール山の爆発による被害で、村を外輪山に移し、巨大なウルン・ダヌ・バトゥール寺院（Pura Ulu Danu Batu）（寺院はPura（プロと発音）といい、ヒンドゥー教の祈りをささげる場所をいう）を移転して再建した。

寺院の中に入ろうとすると、正装をしていないとだめだと言われる。道を挟んだ向かいにあるお店のお母さんが、手招きをしている。お店のお母さんに言われた所に行ってみると、そこで入場券（五百円）と、正装のサロン（腰巻）とスレンダン（帯、計二千円）を売っている。そしてその中の体格のいいお母さんが寺院を案内してくれる。

案内のお母さんは場所、場所でお金を供えながら歩いていく。寺院の真ん中の広場では白い装束を着た十数人の団体がひざまずいてお祈りをささげている。私もひざまずいてお祈りをする。すると案内のお母さんが、額の真ん中にお米を付けるようにと、濡らしたお



バトゥール山をバックにサロンとスレンダンを着て

米が入ったざるを持ってきてくれて、耳には小さな花を一輪挟んでくれる。お母さんと別れる時には案内料を請求される。きつと神様に供えてくれるだろう。

ホテルに帰って、朝食のナシゴレンを食べる。食べ終わって妻に電話をする。電話を終わって、妻の話に違和感を覚えて、妻の話を振り返っていると、今日がバリ島の最終日であることに気が付く。明日の早朝〇時二十分に飛行機が発発する。

島の最終日はリゾートホテルに泊まって優雅に過ごすと思っていたのだが、ここからまっすぐにデンパサールに向かうことにする。外輪山を走っていると、カメラ撮影用の広場があり、そこでロードバイクに乗った十人くらいの団体と出会う。みんな自転車用のパンツとジャージで決めている。バリ島を走っていて初めて見る自転車であるが、初めて会ったと思ったらまとめて十人に会った。どこから来たのか尋ねると、お隣のジャワ島のポロブドゥール寺院の近くからだそうだ。インドネシアでもロードバイクが盛んなのだろうか？

山から南へと下っていく道は、山の北側とはまるで違って、道も広いし勾配が緩やかで、所々にある街も賑やかである。気持ち良く自転車を走らせる。これなら、島の東海岸へ出て、海沿いをデンパサルまで行く時間があるのではないかと、グーグルマップを見ながら、二十分

位どうしようか迷う。わざわざ最終日に大変な思いをしなくてもいいかと、予定通りの道でデンパサルへ向かうことにする。のんびりするよりも、わざわざ遠回りをして、自転車をこいでいたいのだから、私はリゾートホテル向きの人間ではなさそうだな、と走りながら思う。

バイクと車の混雑にもいつの間にか慣れていて、バイクに混じってデンパサールの街中も楽しく走る。初日に泊まった同じホテルに荷物を預けてあるので、ホテルを探すが、同じところを行ったり来たりして見つからない。探していた道の側の、反対側にホテルがあった。山の見えない街中は方向感覚が麻痺する

ホテルの部屋では、心行くまで自転車を拭いてきれいにする。なにか音楽を聴きたくなる。そういえば、今回は旅のテーマ曲がなかったなと思う。バリ島の音楽のガムランを検索すると、西洋人のガムランの打楽器奏者が武満徹の「雨の木」を演奏している。「雨の木」をリピートして聴く。「雨の木」はガムラン音楽の影響を受けているのだろうか？武満徹は「作曲家はまず、生命、宇宙、自然、そこから生まれ出る命の音を、心を込めて聴こうとする」と言ったらしい。

シャワーを浴びて自分でマッサージをして街へ繰り出すと六時になっている。高級そうなインド料理店に入っ

て、ビールを頼む。ビールを運んできた二十歳過ぎのバー

テンドーに何歳かと聞かれる。「あなたは僕のおじいさんによく似た人だ。おじいさんもいつもニコニコしている」と少し話をしてカウンターに戻っていく。ハンサムな青年にこう言われて、悪い気はしない。バリ島で生まれて、バリ島でニコニコと暮らしているおじいさん。ここで幸せに暮らしているもう一人の自分を想像する。

表通りのマッサージ店の店員さんと目が合って、予定にはなかったマッサージ店に入る。ベッドに寝っ転がって、癒し癒されていると、バリ島も日本も未来も過去も、すべてが今ここにある。自分たちがこの世界の中心にいるという感覚にとらえられる。